

衝撃だったパワフルな声。 尾崎紀世彦の歌声は日本人を震撼させた

昭和歌謡

誕生物語

第六回

文・山川智

初めて「また逢う日まで」を聞いたとき、鳥肌が立った。そんな経験をした方も多いだろう。

それ以上に尾崎紀世彦の歌声は圧倒的だった。和製トム・ジョーンズと言われたのもむべなるかな。

とても日本人とは思えない声質。確かにクォーターだが、それにしても声帯から飛び出す野性的な響きは木々を揺らす迫力だった。

奮切れのいいリズム、ドライな歌詞、声の力、それらが相俟って日本人の記憶に刻み付けた「時代の絶唱」。2年前69歳、尾崎死しても、この曲によって彼も歌も生き続けるのである。

ボロ14号が月に着陸、日清食品がカップヌードル第1号を発売し、沖縄返還協定の調印が行なわれた昭和46年(1971)――。尾崎紀世彦の「また逢う日まで」はその年に発売された。

父親がイギリス人と日本人とのハーフ。長いもみあげと

バタ臭い風貌の彼が大声量でビートを利かせて歌いあげる。別れの歌は、それまでの歌謡曲にありがちな未練がまし

さや辛い想いなど一切なし。別れの日、ふたりでドアを閉め、表札の名まえも消して出て行く――。そこには、振り返るような後悔や言い訳もなかった。「別れが悲しいなんて、いったい誰が決めたんだ？」的な歌詞が、日本の未来を感じさせるこの年にピッタリとはまり、大衆の心を掴んだ。実は、この曲が尾崎のもとに流れてくるまでには、長い変遷があった。1970年8

月、尾崎はシングル「別れの夜明け」でデビュー。翌71年には2枚目のシングル候補に、当初CMソングとして、「アンパンマン」のやなせたかしが作詞、筒美京平が作曲した曲が上がつっていた。その曲がスポンサーの都合でお蔵入りにな

ってしまふ。そこで、阿久整が詞を書き換え、「ひとりの悲しみ」とタイトルを変更、コーラグループ「ズー・ニー・ウー」がレコード化。悲しいかな、まったく売れなかった。

だが、筒美の曲に惚れ込んだ男がいた。尾崎のプロデューサー、村上司だった。この曲をどうしても尾崎に歌わせた。無謀にも村上は阿久に詞の書き換えを求めたが、阿久は「一度出したものを変える気はない」と、突っぱねた。それでも村上は諦めず、誠心誠意自分の思いを伝えた。

熱意は人を動かすものだ。首を縦に振った阿久は、「安保

闘争で挫折した青年の孤独」をテーマに描いた「ひとりの悲しみ」の歌詞を、なんと「同棲していた2人が別れの日に部屋から出て行く」シーンにガラリと書き換え、どうせ替えるなら、とタイトルも「また逢う日まで」に変更。

するとこれが尾崎の醸し出す独特の雰囲気と声にドンピシャ。結果、チャート最高位1位を9週連続で獲得した「また逢う日まで」は約96万枚の売上を記録。この年の日本レコード大賞と日本歌謡大賞も受賞したのだった。

失敗作から蘇った「また逢う日まで」。尾崎紀世彦を世に知らしめ、日本歌謡界に爆然と輝く名曲となったのだ。■

Yanaka Gai

1962年東京生まれ、テレビ制作会社制作記者を経てフリーランスに。著書に『東方神起の謎』『東方神起J-POPを歩く』『共にイーストプレス』『ヒューマンドキュメント 幸せのさすや』(リトル出版)など。また、出版プロデューサー作品として『生きる 遺家私書』(スター出版)、『アキの休日』(狂食ゼヤル) (共にイーストプレス)などを著す。

